

航 跡

早稲田ヨットクラブ会報

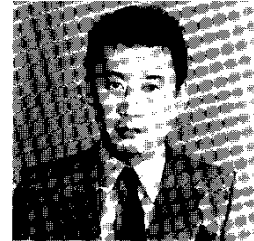
平成4年2月発行

発行者・事務局長 橋 滋夫
 編集・広報室 米田晴二
 石田晋也

—27—

明けまして おめでとうございます

理事長 石井 哲



本年がOB諸氏にとりましてより良い年でありますよう、心よりお祈り申し上げます。

さて、1991年4月に新理事会がスタートし、ようやく8ヶ月余のウォームアップも済み、本年が正念場と理事一同心を引き締めております。

もとより理事・理事会のみでは何をやる力もありません。OB諸兄・諸姉の一層のご協力をお願い申し上げます。

理事会では昨年に引き続き次の2大目標を立てております。

★OB会費の口座振替推進

1991年12月現在で振込を実行していただいている方々は120名程です。理事会では、総計300名以上の口座振替の実施を目標とし、昨年10月にも皆様に用紙をご送付さ

せていただいております。現役を援助するには先立つ資金が必要となります。ぜひぜひご協力をお願いいたします。

★昭和40年卒以降OBの理事会への参加

事務局長：橋 滋夫(S56卒) 会計：佐々木陽一(S59卒) 監督：鎌田 等(S58卒)が中心に頑張っています。ヨット部に熱い想いのある皆さん！お仕事の方もお忙しいでしょうが理事会へ参加して少しでも意見を聞かせて下さい。

その他、現役学生諸君を全面バックアップするためには合宿所、稲竜等々多くの問題が山積しております。皆様に重ねて人的・金銭的なご協力をお願い申し上げます。

'91 W.Y.C 活動ご報告

91年3月20日の総会に於いて執行部交替。石井 哲理事長(昭41)、橋 滋夫事務局長(昭56)を中心とする体制になった。

会議が終るまでは、アルコールを入れない運営で毎月第三木曜日、永楽クラブでの熱心な理事会がもたれている。

理事会を毎月開催することで、現役の状況も掌握しつつOBクラブとしての懇親活動も安定している。この習慣は今年で15年目になる。

名簿の発行 事務局中心に努力中なるもあと一步。もう一寸お待ち下さい。

会報 現役の成績が低迷していると花火も打ち上げにくい。それだけの為でもないが今シーズンも1年1回に止まった。

会費徴収状況 自動引落制度を90年度より導入。120人あたりで伸び悩んでいる。未加入の方は是非参加して下さい。

稲門体育会 5月29日、多数出席

早慶戦 優勝カップ 今度新たに土肥先輩(昭36)より舵杯として寄贈された。6月2日朝三戸神社にて、早

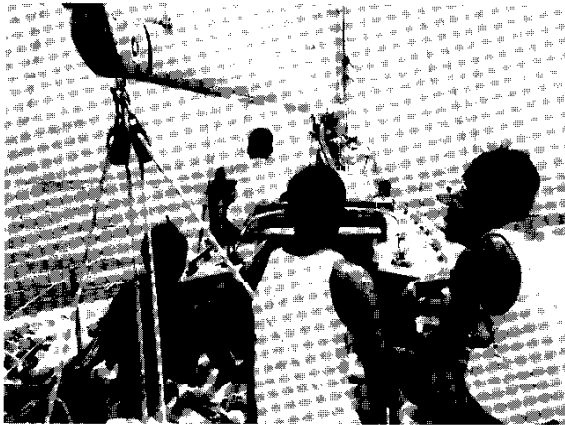
慶合同にて入魂式を挙行した。レースは相手の圧勝にわかりカップをもち去られた。奪還を期待したい。

10大学OBレース このレースは5回目ですが6月8日開催されたが吾々がクラブは本年は都合つかず参加できなかった。理事会にて92年度の出場を検討中。尚、場所は毎年長野諏訪湖。参加チームは殆ど関東各大学OBである。スナイプとシーホッパー、前夜祭、ゴルフコンペもある。

夏のつどい '91 8月24日小島合宿所にて開催。約50名参加。参加会費の一部を学生に寄贈した。

太平洋稲門会 8月9日油壺より熱海へ。早稲田OBのクルーザー多数参加。参加資格は、海を愛し、友を愛し、早稲田大学を愛し、校歌が歌える者。そして参加するに当り自己責任をもてる者である。月光V世・げっこう・おいどん・だばはぜ・青海波・モーニング・タイド・八丈・ウイギー・バニー・ふじIII世などが参加した。西原前総長も司令長官として熱意をもって参加。

夏の実技講習会 8月2日~12日。2チーム。計120人の学生が参加。ヨットは一般学生の人気講座である。石井講師を応援に、陸上からも海上からもOB多数集った。油壺から「げっこう」房州布良(メラ)から「ミス・ニッポン」が応援にきた。余談だが、直木賞作家白石一郎氏は昭27年頃の体育実技ヨット(横浜)の受講学生の



'91夏 実技のため稲電回航 於東京湾口

一人だったとのことである。

A級デインギー 全日本 今や日本全国探しても珍しいA級でレース挙行。7月28日。40年前の学生だったOBが熱意をもちあげる。元オリンピック選手や全日本チャンピオンも数人いる。陸から見てもピチッとしたレー

ス振り。立教OBが優勝した。次回は早稲田が当番校。

六大学OBレース 中止 台風の為。よって92年も関学が当番校(9月の予定。)

合宿所 (別記)

校歌 手塚七木氏より歌詩が出来ており小委員が選任され作曲を手配中でしたが、此度早稲田グリークラブOBで『ボニージャックス』の玉田元康氏が作曲を快諾して下さい、2月20日の理事会に試聴が間に合うよう作業に入りました。学生が愛唱できることを最大の目標にして、試聴の結果気に入らなければやり直しにも応じます——皆さんの歌だから、と大変ご好意と理解に満ちたお話をいただいております。

ヨット部50年史配布完了 59年に発刊して全OBに配布したが、残部を以後の新OBにも配り終った。お手元の本は大切にしてください。ご不要の方は御寄付ご返本いただければありがたい。

理事会は2年任期にて、後半1年に入ります。皆様のご協力をお願いします。

昨シーズン現役の状況

4年生 10人、3年生 6人、2年生5人。それに特別選抜3人、学院から2人を含む新入生という構成で例年に比べて経験者の多いメンバーであった。しかし成績は別表の如く残念な結果に終わった。

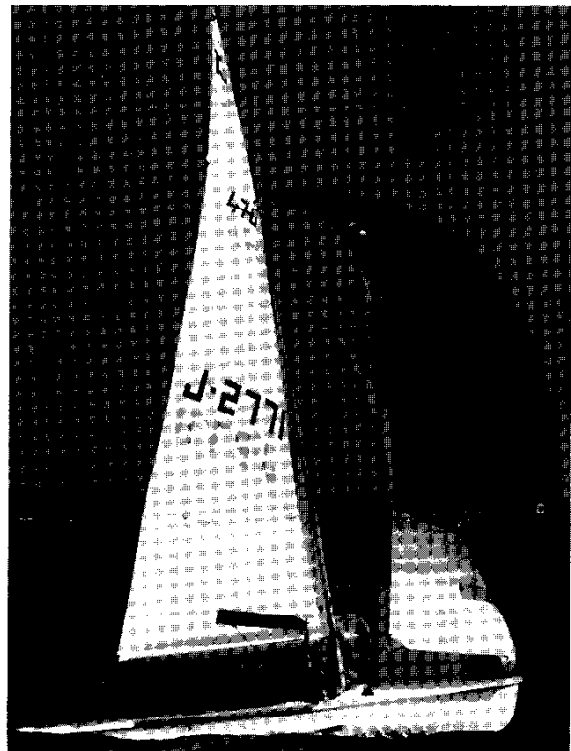
	470級	スナイプ級	総 合
春季関東インカレ	2位	3位	3位
六 大 学 戦	3位	3位	3位
早 慶 戦	敗	敗	敗
同 志 社 戦	敗	勝	敗
秋季関東インカレ	3位	5位	3位
全日本インカレ	5位	10位	6位

(台風の為秋五大学・中止)

関東水域では、慶応と日大がAクラス。続いて早稲田・明治・関東学院が競い、これに東大・法政・中央・立教がからむ展開が多かった。各校共、高校からの経験者も多い。年間のレース数が多く、合宿レースも多いのだが調整を誤るとあっという間に叩き落される状況。

全日本は風を期待して11月になったのだが、今シーズンは大阪湾淡輪で風の吹かないレースになった。第一レースは好調で関西OBを湧かせたが、そこまでに終り無風と潮に苦しめられ結果は6位に止まった。

来るべきシーズンは4年生6人、3年生3人、2年生11人、これに新人ということになる、特別選抜2人が決っている。



'91.11月 全日本インカレ 於大阪淡輪沖
470級 スキッパー-島山(2年)、クルー-石田(4年)

理事会日程 '92

2月20日、3月19日、4月16日、5月21日、6月18日、7月16日、8月後半(夏のつどい)、9月17日、10月15日、11月19日、12月17日(忘年会)

場所はいつでも永楽クラブ(TEL 03-3231-6439)

時刻は、18:30より

参加は、特定理事以外の方も歓迎。是非ご意見を。

—小島合宿所ものがたり—

今の学生や若いOBにこの合宿所の歴史を知らせたいという理事会での意向をうけ、編集部は部史を再読し堀江先輩他にお話もうかがい物語風にまとめることにしました。

各年代の方々、大々の思い出をもってお読みいただきたいと存じます。

現役は例年2月11日、合宿開きを催します。近くの三戸神社に詣で、その年の安全と必勝を祈ります。そして合宿所で神酒をいただき暖かい物を食べるのです。監督やOBに気合いをいれられ、次第に気持が高揚し、以後の合宿生活に入ってゆくのです。新しい学生が入ってきて4年でOBになってゆく。この合宿所から何人のヨットマンが育っていったのでしょうか。

この合宿所は1968年(昭和43年)から使われています。実業家・小島孝徠氏から借用してもう24年ですね。全てのご好意に頼っているのです。

小島という名は私達OBには忘れられない名前です。



'92. 2月11日 小島合宿所にて合宿所開き。
早風の碑をかこみ会食する学生。

1962年11月3日。早稲田の大型艇33フィートの早風が初島レースのフィニッシュ近い浦賀水道入口辺りで遭難しました。6人の若い命が失われました。4年生の小島信浩君がその一人です。11月始めの不安定な気象条件は全参加艇を大変苦しめました。同じレースに出場してコンテッサに乗っていた石原慎太郎氏は作品『星と舵』の中にこう書いています。



昭和54年11月の早風会 三戸浜にて。

『眼を閉ざすと、今でもはっきりと浮んで見える。初島を廻って、日没直前の濃い灰色の海に黒い船体をのめる様に傾け、帆を水に接せんばかりに激しく傾斜しながら必死に僕らの後を追ってきた「早風」の姿を。あの灰色の背景の中に浮んだ黒い「早風」の姿は、不吉というより雄々しく鮮烈な黒装束の騎士のように思い浮べられてくる。』と。

この光景は、相模湾でのことです。今の合宿所から見える方向だったのでしょう。コンテッサはレースを中断し油壺に入り、早風は東京湾に入って遭難したのですから。

小島信浩君は情熱の燃えたぎる青年でした。このレースのあと世界一周をする計画もたてていました。鉄船で早風2世と決めていました。しかしそのメンバーと共に突然逝ってしまいました。

小島孝徠氏は、その父君です。たまたま三戸浜に土地を所有されており「別荘を作るから使いなさい」とのお申出があり、吾がヨット部はすっかりそのご好意をうけているわけですが、実は小島さんはヨット部の合宿所用に新たに設計され諸設備もご準備されたのだと思います。風呂場やトイレなど良く配慮されているのがよく判ります。

早風碑。設計は東大ヨット部OBの建築家、山田水城先生。江ノ島ヨットハーバーの設計者でもあります。鎌

倉建長寺の老師の読経を賜わり除幕式をしたのが1972年5月のことです。もう20年たつのですね。

ご近所に慶応の合宿所があります。慶応とは、ヨット部の始めから世話になったり競ったりしてきました。東京湾が本船の出入りも激しくなり、横浜は沖へ沖へと埋たてられてゆき1963年で横浜での早慶レースが終了しました。横浜にあった早稲田の合宿所は慶応の合宿所の土地を半分わけてもらって建てたものでした。早稲田が三戸浜に到着することに決めて慶応に声をかけ今の様になりました。7年間葉山でやっていた早慶戦を1972年から三戸浜でやることになったのです。

電車も二浦海岸で終点でしたし、道路も未整備でした。三戸浜を説明するのに困る位でした。海岸も静かなものでした。

1969年、三戸浜での練習を積んだA級チームが全日本で優勝しました。於西宮。時の主将北島君は直ちに小島さんのお宅にお礼に行ったものです。

1972年、A級のレースは最後になりました。新しい時代が来て1973年から470級が採用になったのです。早稲田470軍団は全部三戸浜育ちです。

毎年8月「夏のつどい」がここ小島合宿所で開かれOBと家族が学生諸君と交流します。美しい相模湾を眺め今は亡き先輩に献花します。30年前に星となった6人が早稲田ヨット部のOBのタテヨコのつながりをどんなに



小島さんご夫妻

強めてくれたでしょう。今年1992年は早風30周年を計画中なのもそうした由来によるのです。

小島孝徳氏の思い 先輩たちの気持 沢山の人の心に包まれて 小島合宿所は早稲田のヨットマンを育てているのです。1981年、早稲田大学百年記念の映画が作られました。学生生活を描写する内で、小島合宿所での学生たちが美しく撮影されています。最も詩的な部分でした。

この環境の中で新しい気質が生まれているのでしょう。何も知らずに今年も新人が加わります。ヨットを通じて大きいものを学ぶ場としての小島合宿所であること伝えてゆきましょう。



昨年を振り返って

91年度主将 児玉 芭晴

僕達の1年間はあっという間に過ぎ去ってしまいました。今では全てが昨日の事の様に思え、金曜日の晩には合宿所に行かねばならぬ様な錯覚に陥る事さえあります。その1年間は全日本インカレ優勝という唯一の目的の為に費やされました。しかし、その1年の間に数々の不祥事を上期責任で招き、OBの方々には幾多の御迷惑を御掛けしました。

『お前は早稲田史上最悪の上期だ。』と言うきつい言葉も度々受けました。実際、僕等上期の間でも、何故今までの上期に出来た事が自分達には出来ないのだろう。と悩んだのも事実です。それも今考えると主将であった私の責任感の無さが招いた事としか思えないのです。しかし、その様な私達であった事が、インカレで優勝したいという切実な願いに一層結びついたのも確かでした。

僕等上期は早稲田の長い歴史の中で培われて来た練習方法やその他の事を含めて、良い所を受け継ぐのは当然として、なるべく自分達で新しく創り上げインカレに挑戦してみたいという願いと共に、今までと同じ事をしていても今年は勝ち目が無いという緊迫感もあったのです。その結果、練習後に3kmの登り坂でタイムを計ったり、

上期がミーティング後に資料を下級生に配りチャンピオンになる為の研究などもしてみました。他にも新しい練習方法や、練習スケジュールも試してみたのです。

しかし、試合では良い結果はあまり得られず、自信を失う事も有りました。そんな時も下級生の中に3kmの坂道を一生懸命タイムを向上させようと真剣に挑んでいる姿を見たり、仕事を懸命にしてくれている姿を目にすると、必ず結果を出せる、最後に勝てるかもしれない、諦めてはいけないと思う事が出来たのです。

結局今年のインカレでは総合6位という成績で終わってしまい今でも諦め切れません。結果だけに固執するのは馬鹿げているかもしれませんが、しかし、僕達は早稲田の20年ぶりの優勝を夢見て、その栄光を自分達が実現したいと思っていたのです。それが結果に固執する事になってもいいと思うのです。

優勝する事、それが僕達の実現したい事の全てであり、今やりたい事、成し遂げたかった事であったのですから、僕等上期はその夢を実現させる機会を失いました。その時僕は自然に涙が溢れました。他にも上期の中で同じ姿を目にしました。しかし、下級生に早稲田の歴史と自分たちを含めた数々のOBの方々の想いを秘めた夢を託したいと思います。

1年間私達を支えて頂いたOBの方々に厚く感謝いたします。

空蟬(うつせみ)山に登る

千葉右一夫妻 南海定住か

VANUATUのPORT VILAから年賀状がきました。南緯18度東経168度、サンゴ海の東南辺りである。リーフに乗り上げどうにもならず、一時は艇の放棄を覚悟した。大潮で何とか離脱したがうつせみ大破。しかし各国のフネの人たちに助けてもらいつつ修理したという。昨秋、斎藤君に寄せられた手紙をご紹介します。

お元気ですか。今、空蟬はちょっとした有名人です。(Reefを2日かかりで越えてショートカットしたバカなヤツとして……)

10月7日夜半夜明け前、Port Vilaの北120マイル位のReefに追手で乗りあげました。月がなく満潮で、波がはっきりせず、まいりました。あとで考えたら、東から西へのあの付近の潮はえらく強かったようです(3~4ノット以上)。

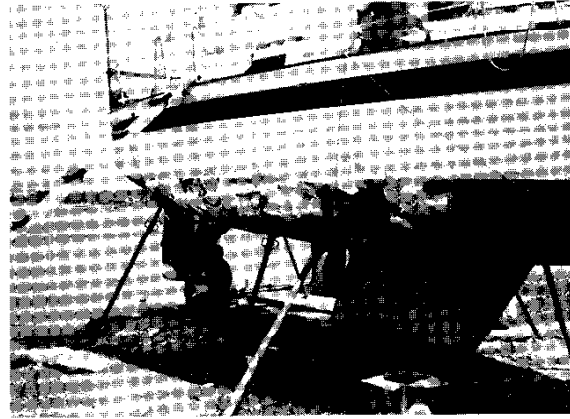


これだけ座礁するには腕が必要!!

VHFで連絡したら付近にいるヨットが4ハイすぐ来てくれました。夕方の満潮時にひっぱり出そうということで、空蟬の中の荷物全部(全てです)を、他のヨットに運び軽くしてはみましたが、75フィートのカタマランで引いてもReefの端が高くなっていてダメでした。その晩は75フィートのカタマラン(Australia船籍)に泊めてもらいましたが全く寝れず空蟬をどう処分するかばかり考えていました。

このままReefに置いておくのはかわいそうなので、バラストをはずしハルを沖に出し、沈めてやろうと決めて朝が来ました。空蟬は朝の満潮時に昨日の位置から自力で100M程バックしていました。キールでReefを削った道が出来ていました。

この日に試したことは、直径1M長さ2Mのブイ6ヶ(こんなのを持っているヨットがいるのです!!)で、空蟬を浮かし昨日とは反対の方向へ空蟬を引っばること。これは近くの村人数十人の手を借りました。約3時間、



満潮時をねらい、波に合わせて全員で引くだけです。その度かけ声をかけるので、ノドはガラガラ、でも空蟬は浮いてくれました。そのうれしかったこと、全員に飛びついて礼をいいました。

翌日は近くの入江へ引っばってってもらい、空蟬をチェック、全員でなんとか走れるよう応急整備をした後、3日かけてPort Vilaまで戻りました。夜はアンカリング、3隻のデカイヨットにつきそれぞれ今までで一番楽な移動でした。

そして陸揚げ、修理、ラダーシャフトの曲り(2方向)を直し、スケグを強化。ハルへのF.R.P張り、等々。知らない人がどんどん手伝ってくれ、無理やり動かされた感の3週間でした。例えば、ラダーを抜くのに丁度下がコンクリだったため、クレーンで動かすには金がかかるという、すぐ翌日コンプレッサーと職人2人をよこしてくれ、1日かかりで80cm位の深さの穴を作ってくれた(全部コンクリですよ!)ベトナム人。人手がいるだろうとって毎日、社員を1人よこしてくれた会社社長等々。その上多額の寄付まで集めてくれたV.C.Y.C.のCommodore: Ross Wilson氏、信じられない毎日です。特にV.C.Y.C.にはN.O.R.C.から礼状を出してもらいたい気持です。

11月6日空蟬はハル(片側)、船底を塗りなおし、又、水に戻りました。そして11月19日のサイクロン“TIA”、今年の第1号、座礁のどさくさでC.Q.R.アンカー、チェーンを無くしている空蟬はヒヤヒヤもので2晩寝ずのウワッチでしたが、何とか直撃はまぬがれPort Vilaの東70マイルを通り抜けてくれました。あまり安全な港でなくこれからが少々心配ですが、来年春まで、ここで世話になった人々に何か恩がえしをしていこうと考えています。

我々はいたって元気です。
皆さんよろしく

空蟬 千葉右一・侑子



宮川先輩 を偲ぶ

堀江 喜三 (16年卒)

昭和15年卒業の宮川先輩をご存知の方は関西在住のOBは兎も角として関東のOBでは30年前半の方々くらいではと思う。

同氏は控え目な余り目立つ事を好まない地味なタイプであった。その風貌は少々広い額と天然パーマと云われた縮れ毛で合宿の時洗髪後のリンパ髪は見た事がなかった。

昭和13年同期の名将田原正信氏が主将になると副将格として良く補佐をつとめられた。又同氏は夏季合宿を高等商船学校(現商船大)の大成丸の共同生活方式をとり入れたユニークな合宿を組立てた。先ず朝は総員起し15前から始まり、食事集合・練習始め・就寝・消灯に至るまで当番がふれ廻った日課は当時一度に100人余りの合宿であっただけに、時の風潮とも併せて規律のある若々

しい集団生活の思い出を作った方でもある。

一方平常時には常に裏方に回り所謂ストーキー(倉庫長)として艇の整備に専念。人の嫌がる艇の清掃や、あと片付け、大半の人が帰ったあとも残業と、いわゆる3K的な事を自身が率先してやられた、当時の後輩が等しく尊敬した上級生でもあった。

もう一つ同氏が他の先輩と違った点は早慶・インカレ等のレースで下級生をクルーとした場合本来なら上級生がスキッパーとして舵を握るのが当然だが同氏は殆どクルー側に位置して下級生をコーチし乍ら帆走させる方法をとった。つまり同氏がコースの選定、タックの位置、上らせすぎ(ラフ)か、落としすぎ(ベア)かを指示、下級生はひたすらセイルを見て走らせれば良い訳で前後左右の気配りは全く不要という方法でその相乗効果を引出す事にたけた方だった。

戦後休日は殆ど西宮コットハウスに顔を出していたと聞いている。同氏の人柄と豊富なヨットの知識を謙虚に語り続ける氏の廻りに良く人が集まったという。又私淑する人もあったと聞いている。

数年前から体調を崩され平成3年7月27日76歳で静かにその生涯を閉じた。

茲に皆様と共に謹んで故宮川清先輩のご冥福を祈る次第であります。



編集子のたわごと

○2期4年の並木理事長、木村事務局長他の理事諸先輩は、葉山での合宿所火災という大事件の中で大変ご努力いただいた。遅まき乍ら皆で感謝したい。

○若い層に運営を委せようと、石井・橋体制がスタートして1年。やはり若い理事の出席が次第に増えてゆくのが良い。

○一人この航跡子のみ老骨にムチ打っている。小生この会報が出る頃還暦をむかえます。昨年はもう仕事と遊びに忙しかった。この会報のことも忘れていた位。『げっこう』で鳥羽レースに出たが、たちまち船酔い。トシとったノと痛感した。管に迷惑かけた。

○昭和28年の早慶戦と一緒に沈をした金沢氏と稲竜で岩井へ廻航した。湾口で早風を追悼す。岩井から陸路那古寺へ行ってみた。学生時代合宿した那古寺が立派な寺であるのに驚いた。周辺はすっかり変って昔日の面影なし。おむかいのアレもない。右のラーメン屋もない、左のカメ福もない。その昔は砂浜に面していたと説明書にあった。感無量であった。

○11月に逗子マリナーでレーザーに乗る時、落水した。年はとりたくないものだ。若い女性のハーバーの係員に教えてもらい糞装をする。実に簡単でやり易い。それを昔流に複雑にやって女の子インストラクターに叱られる。『ホントーワー・コーセッター』という具合だ。

○レーザーで沖に出て昼寝しながら浮いていると、若い男女がウインド・サーフィンをやっている。こちらを見てジジイがのっているのだから呆れている。もう一隻のレーザーにも遊佐というジジイがのっている。沖で風がない



那古寺

ので駄乗り合う。定年後の相談をしている。まるでマンガである。

○12月中旬、ウラジオストクに行った。油壺を大きくした様な港で軍艦がずらっと並んでいる。文字通りの天然の良港。市役所の売店で470の表のついたカレンダーがあったので買おうとすると、売り子がやめろという。91年のカレンダーだから。表の470のピクチャーが欲しいと買ったら別の人がまた注意してくれた。善意の人たちであった。92年のカレンダーを作れない病の深さを見た。

○いよいよ総会も近づいた。航跡の編集作業にかからねばとやり出したら、ポニージャックスの玉田氏から電話だ。やっとな連絡がとれた。部歌の打合せ日程きまる。霊波か何かあるのかな。出来る時はこんなもんかな、と思っていた矢先、南洋の千葉右一君からハガキがきた。今夜は、小沢さんにどなられるユメでも見そうである。

(米田晴二 記)